

第2回 最優秀賞

「自分は必ず」

宮崎県立高鍋農業高等学校3年

那須正光さん

今、私は高鍋農業高校の農業科で学習している。その中でも、林業経営研究班に所属し、日々の実習に汗を流している。私は将来、林業家になるのだ。

理由は簡単で、実家は椎葉で農林業をしており、私は長男だからだ。いや、そんなことより何より、私は、林業という仕事に誇りを持っているのだ。私の夢なのだ。山奥で木々にしがみつくより、若いうちは街に出てこいと言う人もいる。しかし、林業というものは、そんなものではない

確かに、北海道に次いで素材（丸太）生産第二位を誇る宮崎でも、林業の現実には厳しい。世の中の動きと連動しがちなため、オイルショックやバブル崩壊で大ダメージを受けた。その後故郷の林業も大きく低迷し、山を手放す人も出てしまった。ただ山というけれど、一本の杉を植えて、それが成長するまでには親子二代の年数が必要だ。私の父も、祖父も、曾祖父も、そうやって山に木を植えてきた。代々手を入れてきた山や木を手放すことがどれほど辛いか、私にはよく分かる。

そして高齢化のために、人の数が減っていく。私の村も、過疎と言われるようになって、山を守る人間が年々消えて行く。

しかし、考えてもらいたい、山を守るということがどれほど大切なことか。山には木があり、水があり、空気がある。かつては美しい自然を誇った日本が、今失いつつあるものを、山はまだ持っている。管理できる人間がいなくなれば、無闇に伐採されて生き物のいない山にな

ったり、潰されたりするのではないかと心配でならない。自然と合わない無計画な伐採や様々な開発、そしてゴミの投棄・・・、山を苦しめるばかりだ。

森林の働きには、水源涵養、国土環境保全、保健休養の場、木材生産の四つがある。これはすべて林業家が担っているものだ。が、考えてみると、林業家の利益になるのは木材生産だけだ。他のものはすべて、他の人の、日本の、世界の利益になるものだ。林業家は、仕事をしながら、地球の自然を守っているのだ。私は、地球を守るためにこれから自分が何をすればいいのか毎日夢見ている。

私は中学を卒業と同時に親元を離れ、全寮制の農業高校で学んでいる。しかし、学校の山は規模が小さいので物足りない。私は、できるだけ多くの知識を吸収して高校を卒業し、静岡にある林業専門の学校に進学するつもりだ。そこでは、大自然の森林を面前にして林業の作業と育林について学び、必要な免許もどしどし取得する。

より実践的なことを身につければ、故郷・椎葉に帰ってすぐに役立てることができる。椎葉に帰ったら、一人でも多くの林業経営者と出会い、椎葉の山を、日本一、いや、世界一にしてみせる。それはただの私の夢ではない、実現すべき希望なのだ。そして、同じ希望の人と結婚して、たくさん子供を作り、彼らと夢を語ろうと思っている。

第2回 優秀賞

「盲導犬のアジア地域への普及」

福岡県立久留米高等学校3年

今村 静子さん

私は中国で育ちました。小さい時にテレビで日本の盲導犬に関するとても印象深い物語を見たことがあります。サブという名前の盲導犬が雪の中でご主人をリードし、向かい側から走ってきた車からご主人を無事避けさせましたが、サブは車にひかれ、一本の脚を失ってしまいました。しかし、手術やりハビリを経てサブは奇跡的に仕事に復帰しました。サブが三本脚でご主人をリードしている姿は、私の心に深く焼きつきました。そして、日本にはサブのようなスーパードッグがたくさんいると信じていました。当時の私には、日本に行きサブのような犬に会うのが夢でした。サブが活躍する国ー日本は、障害者にやさしい国に違いないと思っていました。

しかし、実際の日本は私の想像した日本の姿とは少し違っていました。私は日本に来てすでに三年になりますが、まだ一度も盲導犬を見たことはありません。そのかわり、道にある段差や、黄色のブロックの上に置かれた自転車などで困っている障害者の方をよく見かけます。私にとって「サブ」がいるはずの日本は、まだまだ障害者にやさしい国ではないように思います。

では、その本当の姿はどうか、私は一年間をかけてその実態を調べました。調べた結果、日本に二十万人いる視覚障害者に対して、盲導犬は八百頭しかないことがわかりました。私の住んでいる町では、私がほぼ調べ終えた頃、やっと一頭の盲導犬が活躍するようになりました。私がさらに驚いたのは、アジアでは日本にしか盲導犬がいないとい

うことでした。私はもともと獣医になりたいと考えていましたが、この事実を知って、将来、獣医として働く傍ら、盲導犬のアジア地域への普及に力を注ぐと心に決めました。

盲導犬は多くの人にとってただの犬かもしれせん。しかし、目の不自由な人にとって、盲導犬は目の代りの存在であり、人生と一緒に歩むパートナーでもあるのです。目の見えない人は、かけがえないパートナーと出会い、自分たちの力で確実に活動の範囲を広げていきます。私は、障害者の自立という面でそれ以上すばらしいことはないと思います。しかし、アジアで唯一の先進国日本でさえ、盲導犬はまだ普及していません。それには経済的な理由が大きく関係しています。今、日本では一頭の盲導犬を誕生させるのに六百万円以上が使われています。障害者の中でも、そのお金をみんなに分けて使ったほうがいいという人がいます。私はそのような人がいることをとても残念に思います。確かにそのお金をみんなに分けて使ったほうが一時役に立つかもしれませんが、一人の視覚障害者の人生を自立したものに導く道を広げることこそ、盲導犬が存在する意味があるのだと思います。盲導犬を普及させるためには、経済的な支えは重要ではありますが、人々の盲導犬への関心をもっと高めることが大切と考えます。

これからのアジア諸国はさらに経済的に発展していくでしょう。この経済の発展にふさわしいレベルまで人々の盲導犬への関心を高めることは、非常にやりがいのある仕事だと思えます。私の力は本当にわずかかもしれませんが、私はこの小さな力で盲導犬のアジア地域への普及に貢献したいと思えます。

第2回 優秀賞

「幸せ進化論」

佐賀県立佐賀西高等学校2年

田中まどかさん

「赤ちゃんはおなかの中に居る時、手を固く握っているのだけど、生まれる時にびっくりして手を開いてしまうの。そうして手の中にあつた”幸せ“はどこかへ飛んでいってしまふ。人はその失くした”幸せ“を見付けるためになら、どんなに苦しくても、正しく生きる事を諦めたりはしないのよ。」

万引きをした生徒を責めるかわりに、私の担任の先生は泣きながらそう言った。当時中学生だった私にとって、その言葉は、先輩の話や進路指導の授業よりもはつきりと心に残るものだった。五年経って高校生である今、進路を、将来を考える時になって、私はふと考えた。夢を叶える事だけが本当の幸せなのだろうか。目標にたどり着いてしまった後には何が残るのだろうか。私の夢、目標、そして幸せとは一体何なのだろう、と。

将来の夢は何ですか、とは進路を決める上で必ずなされる質問である。ここで具体的な職業を挙げる人がほとんどだと思う。恥ずかしい事だが、私の将来の夢とは単なるあこがれであった部分が多い。格好が良いから、楽しそうだからと、単純な理由付けで夢が成り立っていた幼い頃の私は、それが人生の全てだと思ひ込んでいた。夢が叶えばきつと楽しい人生が最後まで続くのだろうか、とか、お金があれば一生楽できるだろうかといった具合に。しかし、私は目標を達成した人が必ずしも幸せの中にいる訳ではない事を知った。有名人の自殺や幸せな家庭の中にいるはずの人の離婚。このようなかで、私は幸せである事の意味の糸口を、見失ってしまったのである。

そんな出来事も忘れてしまっていた中学二年の春、一つの事件が私を大きく変えてくれた。その当時、私の家には痴呆で寝たきりの祖母がいた。おばあちゃん子だった私にとって、昔からは想像もできない程やせている祖母を見るのは辛かったが、せつせと世話をする母の姿が私を勇気づけてくれた。寒い朝、母と二人で祖母のおむつを取りかえていた、その時だった。私達の名前も言えなくなっていた祖母が、「ありがとう」とはつきり口にしたのだ。私と母ははっとして言葉が出なかった。その後、母は汚れた手で涙をぬぐう訳にいかず、手を洗うまですつと泣いていた。そして言った。「今の私は本当に幸せ者だ」と。その時、私は、幸せというものは自分の手だけではない。幸せは自己完結ではなかったのだ。与えられる幸せが存在する。それは、母の祖母に対する愛と努力がもたらした「幸せ」だったのだ。祖母はたった一言で、私達家族に人生の最も重要なことを教えてくれた。

私もそうであるように、夢や目標はコロコロと変わりやすい物なのかもしれない。それもそのはず、それらは常に具体的な物でなくてはやりがいが無いからだ。しかし幸せというものは人の価値観しだい、ふとした事からひよっこり糸口が見つかる、抽象的な物。だから二つは少しひずんで、目標と幸せは一致しない時もある。大人や社会の造った幸せの「型」に当てはまるとは限らない。だから、はた目から見て目標に到達していても、幸せだとは決められない。それは本人の心の中にしか存在できない思ひなのかもしれない。

私は、これからもどんどん目標と夢を持って、一つずつ叶えていく事で、私

第2回 審査委員特別賞

「大志を語る」

鹿児島県 神村学園高等部3年

平藪香菜さん

だけの「幸せ」に近づいていきたい。今は医師になりたいと思っっているけれど、私の「幸せ」が別の方向にあるのなら、急にそれ以外のものになろうと思うかもしれない。本当に大切なのは、その時々で目指す事を一生懸命やるという事だ。未来の幸せは、きつとそこで待っていてくれている。私の「幸せ」はまだはつきりと見えない。けれど、幸せが何かを教えてくれた先生、優しく強い母と祖母の一生を凝縮した言葉と出会えた「仕合せ」は、私の心の中に、しっかりと根を下ろしている。

私の長所は楽天的で積極性があること。少々の困難は自分に与えられた試験の時と考え、前向きにとらえることができる。

高校一年次にはアメリカに短期留学。英語は好きで、それなりに勉強し、自信もついていた。そして二年次には、アメリカに一年間の長期留学をした。

長期留学した先は、ペンシルバニア州のダウンニング高校。その高校の中でたった一人で、まさしく孤軍奮闘する日本人留学生がいた。それが私である。一、二か月経っていた。授業では、必ずと言っていいほど自分の考えや意見を求められる。私が答える。発表する度に、発音がおかしいとか英文がなっていないなどと、辛辣な批評や冷たい視線が浴びせられる。自分を表現できないため一部の先生方からは煙たがられてもいた。友人も少ない。日本を離れ、周りに日本語で相談する相手もないので、さすがの私もこたえた。しかし、心の中では、英語力さえつけば私だって、と考えていた矢先、一気に落胆する出来事が起こった。ある先生が聞いた。「日本の今の天皇の名前は何だ」

私は答えられなかった。我が国の天皇の名前を知らなかったのだ。自分がまったく無知であり、「いかに話すか」の前に「何を話すか」が欠如していたのだ。話すべきものを何も持っていないことに気付かされた。

こんな私と対照的だったのはヨーロッパからの留学生達であった。彼らは自分に誇りを持ち、そして自国に誇りを持っていた。英語力も完璧に近かったが、

何よりも驚いたのは、彼らの行動力と国を愛する心。アメリカの高校生も賛嘆した。そして彼らは、自国の代表だという意識を常に持っていた。

二か月に一度ほど、私の留学団体が主催する、全留學生が集まりそれぞれの特技を披露するイベントがあった。私は日本舞踊をすることになっていた。ところがアルメニア出身の女生徒が、自分の踊りが目立つよう私を目立たないところで踊るよう仕向けた。そこで口論。お互いの悪口を言う。彼女は言い始めた。「英語も下手くそなくせに。あんたみたいな人の踊りなんか誰も見たくないんじゃない？」

私は強弁にねじ伏せられた。その通りである。英語力もない、日本の天皇の名も知らない、日本を知らない。落胆の日々が続いた。

しばらく経った頃、自分を変えるものに出会った。国連ニューヨーク本部を訪ねた時のことである。スウェーデン出身の男性が、国連の目的、意義を流暢な英語で紹介していく。そして、ある一角に来た時、なんとそこには、広島、長崎に落とされた原爆についての紹介コーナーがあった。焼けただれた湯のみ、皿、衣服、原爆の悲惨さを綴った詩や日記などの多くの資料、原爆投下後の写真――私の体内を大きな衝撃が走る。

私は日本について何一つ知っていない。分かったつもりでいたことが全く分かっていなかった。

男性は説いた。

平和の尊さを。国連の目的を。

更に大きな戦慄が襲った。

私は国連で働く―そう決意した。

世界の平和実現のために私自身を役立てたいのだ。

国連の果たすべき役割はまだまだ多

い。国際間の平和と安全のための役割、子供の飢餓、環境問題と人類が共同で解決しなければならぬ問題が多い。そのために私は何をすべきか。

英語を自在に操ることは大切だが、その前に伝えるべきものを持たなければならぬ。私は平和の心を持ちたい。伝えるべきものを持ちたい。そして将来、私は世界唯一の被爆国の日本人として、世界平和を皆に伝えたい。